



男

性

218

妊

活

男 性

男性のための一か月射精管理妊活プログラム♥

妊 活

produced by LETM

診療カルテ

フリガナ

モリヤ チヒロ

氏名

守屋 千尋

男 女

25 歳

奥様と共に通院。妊娠をご希望。

●●年▲月■日 射精管理妊活開始。

- 一 週 目 ————— 1
- 二 週 目 ————— 29
- 三 週 目 ————— 50
- 四 週 目 ————— 84

〈一週目〉

「えっ、次の排卵日って……一か月後までって事ですか!？」

「はあ、そうなりますねえ」

驚愕を滲ませた千尋の言葉に、男性医師はさも当然の如く頷いた。

ここは明が不妊治療で通院している産婦人科。なかなか子供を授からない二人に対し、というか千尋に対し、医師が提案したのである。「次の排卵日まで射精管理をしてみませんか？」と。

「いやそれはさすがにちょっと……」

まだ二十代も半ばの男にとって、一か月の禁欲はいくら何でも地獄すぎる。しかしそんな千尋の気など知らず、医師は「試されて授かったご夫婦も多くいらっしゃいますよ」と淡々と述べた。

「それに、不妊治療は女性のものと考えていらっしゃる方も多いようですが、子供は二人で作るものですからね。男性も積極的に協力する事で女性にも安心感が生まれますし、女性が精神的に満たされている方が妊娠しやすくなるのは確かです」

「それは……まあ、そうかもしれませんが……」

「先生めっちゃいい事言わはるやん!! 世の男らに聞かせてやりたいわ〜! ほらほら、アンタもアタシばっかりに任

せっきりじゃあかんよ？ 妊娠しいひんのは女が悪いみたいな風潮変えていかなあかんわ〜」

「別に女が悪い言うてへんやん！ 現にこうやって病院付き添ってるし随分協力的やと思いますけどねえ！？」

端正な顔立ちのこの担当医師がお気に入りの明は、すぐ先生の味方に付きたがるし、やたら先生の事を持ち上げたがる。今回に限らずあまりに自分とはタイプの違う男ばかりに騒ぎ立てるものだから、一度疑問に思って「何でその男の好みで俺と結婚したん？」と聞いた所、「好みすぎる男と一緒に生活なんてしたら、気い抜かれへんくて疲れるやん。あんたくらいがちょうどええねん」と。そ、そうですか。

「とにかく、そういった意味でも一度試されてみてもよろしいかと……。ただ私も同じ男として尻込みする気持ちも分かりますし、最終的にはご主人の判断にお任せしますが……」

ちらりと明の様子を伺うと、「まさかやらないとは言わないだろうな」という圧の籠ったジト目を向けられている。これは拒否出来ないパターンだ。やりたくないなんて言ったら、向こう一週間は機嫌が悪くなるし、チクチク刺され続けるし、何かにつけて「結局私ばかり頑張ってる」って言われるパターンだ。それはしんどい。それは避けたい。千尋は結婚してから嫌という程学んでいた。家内安全、それが何よりだと。「……分かりました……頑張ってみます……」

とはいえ、素人がいきなり射精管理しようとした所で、本人の意思だけに任せては絶対に続かない。まずは病院と協力してやっていく事となった。

鍵は病院に預かって貰う形でこまめに通院し、貞操帯の掃除も兼ねての経過報告を行う。担当医師は「最初は慣れなくて戸惑うかもしれませんが、私も全面的に協力するので安心して下さいね」と言ってにこりと笑っていた。協力して頂けるのは有難いのだが、他人に鍵を握られるのが怖いような、恥ずかしいような、なんとも言い難い気持ちである。ちなみに明とはいえば、貞操帯に覆われた旦那の股間を見てげらげらと大笑いだった。誰のためにやってると思ってんねん。泣きたい。

当然この一か月は、セックスは勿論の事オナニーも禁止。次の排卵日まで徹底的に精液を溜める事になる。普通に考えてあり得ない。精通してから今まで、一か月間禁欲した経験など勿論ない。とりあえず明の手前了承はしたものの、続けられる気がしないし、ある程度でギブアップさせて貰えるんじゃないかなあ……なんて、希望的観測もあったりした。だって一か月で。坊さんやないねんぞ。つか今時坊さんでもここまで禁欲しいひんぞ。知らんけど。

お互い子供は好きだし、望んでいるし、夫婦生活を送る上で自然と子宝にも恵まれるものだと思っていた。それがまさ

か、自分が妊活のために射精管理する日が訪れようとは……。人生って、何が起きるか分からへんもんやなあ。洗い終えた調理器具を片付けつつ、重苦しい溜息を一つ。

そんな千尋の肩に、ぽんと手が置かれた。

「千尋どうしたどうした～溜息なんかついて～」

「あ……先輩」

立っていたのは何かと面倒見のいい板場の先輩だった。仕事を丁寧に教えてくれるのは勿論の事、板場に入りたての頃、必要以上にいびり倒されていた千尋に味方してくれたり、努力を正當に評価してくれたり、態度がサッパリしていて好きな先輩の一人である。

「まかない美味かったで。また腕上げたなあ、ご馳走さん」

「はあ、おおきに」

「何や褒められてんのに嬉しくなさそうやな。明ちゃんと喧嘩でもしたん？」

「そんなんで一々機嫌損ねてられませんか」

「せやな！ いつもの事やもんな！」

そう言って快活に笑う男。こちとら全くテンションが上がらない状況のため、笑い声が耳に煩くてげんなりとしてしまう。

「あのお、少しお聞きしたいんですけど、先輩んとこって普通に子供出来ました？」

「ん？ 普通とは？」

「不妊治療とかしいひんと」

「あーうん。せやな。気づいたら嫁が妊娠してた」

「羨ましい限りですねえ。どんだけヤリチンやったらそうなるんですか？」

「お？ さては喧嘩売ってるな？」

「いや喧嘩は売ってませんけど……」

かくかくしかじか。千尋は愚痴半分に不妊治療の経緯を話した。

「うわ、エグいな～。不妊治療ってそんな事までするん？ それはさすがに同情するわ」

「でしょ？」

「今何日目なん？」

「三日目で、今晚病院行きます」

「へえ～。やっぱしんどいか？」

「……言わせへんといて……」

「あっはっはっはっは！！」

「笑てはりますけど本人必死なんでえ……」

そもそもまず、股の間に慣れない異物がくっついているのが気になって仕方がない。お手洗いも今まで通りいかず、先端の隙間から女みたいにチョロチョロと出す事しか出来ない。夜に手癖で股間に手を伸ばさうものなら、勃起すら出来ない事実を突きつけられて悶々してしまう。その上蒸れてムズムズするし、勃起しそうになる度締め付けが痛いし、性欲を感

じる事すらも貞操帯に咎められているような感覚だった。とにかく何かにつけて屈辱的で、この三日間、単純にオナ禁するよりよっぽど辛かった気がする。

（ああもう、何かこんな話してたらまたムラついてきた……）

図らずももどかしい感覚を思い起こしてしまい、ひっそりと太腿を擦り合わせる千尋。しかしそんな千尋の気など知る由もない男は、笑いながら尻たぶに手のひらを打ち付けてきた。

「ッ！？♡」

「じゃあ何か？ お前今も貞操帯してるん？ めっちゃウケんねんけど！ なあなあちょっと見してや〜」

「見せるわけないでしょ！？」

本気で引っぱたかれた訳でも、性的な動作で触られた訳でもない、冗談半分のじゃれ合いのようなものだった。それなのに、振動が股の間を伝わって、下腹部を切なく脈打たせた。

「えー？ ええやん俺とお前の仲やんか〜♡ 見して見して〜♡」

「ん、もうベタベタしいひんといて下さいきしょい！！」

思いもよらぬ感覚に困惑しつつも、これはマズイと絡んでくる先輩を引っぺがす。それから自分の体に起きた事を気取られぬよう、慌てて勝手口に向けて踵を返した。

「おーい、どこ行くん〜？」

「飲み物買うてきます！」

「へんな人に着いてったらアカンで～」

「お気遣いども！！」

からかい半分の注意を遮る形で、荒っぽくドアを開閉して外に出る。途端、路地裏に吹く湿った風がひやりと頬を颯り、自分の顔が熱を持っている事に気付かされた。アルミ板に背を預け、はぁっと一息。胸元を握り締めると、心臓がドクドクと早鐘を打っていた。

(……今、先輩に触られただけで勃ちそうになった……)

そしてその日の夜。早めに仕事を上がった千尋は、件の病院へと訪れていた。待合室のソファに一人腰かけていると、通院している女性達に不思議そうな目でチラチラと眺められている気配を感じる。そりゃそうだ。隣に女が居るならまだしも、男一人で産婦人科。俺でも思う。アイツ何しに来てんねん、と。

「守屋さ～ん、守屋千尋さ～ん」

「はいはい」

そんなこんなで、若干の居心地の悪さと、婦人科で名前を呼ばれる違和感に耐えながら診察室へ。中では、オフィスチェアに腰かけた担当医が、カルテに目を通して最中であつた。

「こんばんは。お加減いかがでしょうか？」

丸椅子に腰かけると、開口一番、様々な事を纏めて詮索出来る便利な言葉で問いかけられた。お加減、と言われても、体調が悪いわけでもなし。何をどう説明すればいいかよく分からず、「ええと、まあ……」と、ハッキリとしない返事を返す千尋。

「貞操帯の着け心地は？ 痛くなったりしませんでしたか？」

「え、っと……痛みは無いです」

「痛みは、って事は、痛み以外に何か気になる事がありそうな言い方ですけど。気になる事あったらおっしゃって下さいね」

「……その、用を足しづらいのと……あと、たまにムズムズするっていうかモヤモヤするっていうか……ええと……」

男同士とは言え深い仲でもない相手に、「ムラついて困ります」とも言えず、適当な言葉で遠回しにお茶を濁す。だが医師はすぐに察しがついたようで「ああ」と口元に小さな笑みを浮かべた。

「要するに、オナニーもセックスも出来ないのも性欲が溜まって辛いという事ですか？」

そしてハッキリと一言。突然の確信をついた質問に羞恥を感じつつも、その通りであるため、首を縦に振るしかない。

「そうですか。三日で辛いて事は、以前は毎日のようにオナニーされてたんですね」

「へっ！？ いや、そ、そういう訳じゃ……」

「別に恥ずかしい事じゃないですよ。まだお若いですし、それくらいあって当たり前ですから」

淡々とした声と共に、カルテに細かい文字が書き連ねられていく。まさか自分のオナニー事情でも記されているのだろうかと思うと、さらに顔に血が集まっていくのが分かった。

(うう……恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい……！)

視線を落としながら、きゅっとズボンを握りしめる。

「はい。じゃあ処置するので、ベッドの方どうぞ」

「しよ、処置？ 処置って、何を」

「貞操帯を外してペニスを綺麗にしないと。あと、どうしても不衛生になりがちなので、炎症等を予防するお薬も塗っていきますからね」

そう説明する医師の手には、いつの間にか小さな鍵が摘まれていた。ゆらゆらと揺れるそれを目にした途端、きゅんとペニスが脈打つ。

(外して貰える……嬉しい……！)

腰元から上がってくる甘い期待に、思わず喉が上下する。しかしいくら何でもこの浅ましさを気取られたくはない。ドキドキと胸を鳴らしつつも、表面上は努めて冷静を装いベッドへと向かっていく。

「ズボンと下着下ろして、足開いて下さいね～」

「はい……」

下半身が丸出しになった状態で乗り上げ、控えめに足を開

いた。するとすぐに「寝転んで、もっと大きく開いて下さい。膝がベッドに触れるくらい」と指示が入った。そんな恰好になる必要性がよく分からないが、指示に従って早く貞操帯を外して貰いたいという欲求の方が数倍強かった。言われるままに寝転んで、蛙が仰向けになっているような格好で、くったりと足を開いていく。

「はい、お上手ですよ～」

全く嬉しくない誉め言葉を聞きつつ、恥ずかしさを誤魔化すように、きゅっと目を瞑った。

金物が擦れる音の後、程なくして締め付けが取り去られていく。ペニス全体が覆われている訳ではなく、金属が骨組みのようになったタイプのものなのだが、それでも外された時の解放感は格別だった。ひっそりと吐息を一つ。ああ、出来る事なら、このまま、外されたままの状態で帰りたい……。

「ん……ッ」

なんて風通しのよい感覚に浸っていると、萎えている竿がふにりと持ち上げられる。

「ちゃんと清潔にされてますね」

「あの……風呂とかで、出来る限りは……」

「そうですか。いい心がけですね。特に炎症起こしている様子もないかな……」

薄いゴム手袋に包まれた手のひらで、先端を撫でたり、裏筋を辿ったり、左右に動かしながらじっくり視線を注がれた

り、まじまじとペニスの状態を検分されてしまう。たかが三日、されど三日。禁欲生活で刺激に飢えていたペニスが、視線と手の動きを敏感に感じ取り、ヒクリヒクリと律動し始めた。

（やば、やばッ……今そんなに触られたら……！）

「あ～、おちんちん勃っちゃいましたね～」

どうする事も出来ず、手に弄ばれるままに、竿が芯を持ってしまう。

「あっ、あの……ごめんなさい……」

語尾をすぼめながら、顔を覆って謝罪する千尋。しかしその間にも医師は手を留めず、むしろ先ほどよりも熱の籠った動きで執拗にペニスを騷り始めた。

「大丈夫ですよ。この治療ではよくある事ですからね」

「う、う♡ んん……♡」

「あ～でも勃起すると少し汚れ溜まってるのわかりますね～。このカリの辺りとか、しっかりお掃除しておかないといけませんね～」

「ひっ……♡」

カリ首に柔らかく湿った感触が触れる。脱脂綿だ。

「では汚れをゴシゴシしていきますからね」

「ん、ッ……♡ う、く……♡」

消毒液だろうか。脱脂綿が滑った場所にすうすうとした感覚が広がっていく。性的な快感だけでなく、清涼感による快

感も同時にもたらされ、処置中にも関わらず思わず悦に入ってしまうようになる。

（気持ちいい♡ カリと先っぽゴシゴシって……♡ あ、あ……裏筋も、もっとやって欲しい……っ♡）

肉棒は大喜びで刺激を受け止めて、ヒクヒクと身震いをし始めた。脱脂綿に弄ばれて、竿にどンドン血が回り、先端が赤く充血して過敏になっていく。奥の方で熱が燻るのを感じ、尿道をじわじわとせり上がったそれは、先端から雫となって顔を覗かせた。ぷくりと溢れた我慢汁を脱脂綿が拭き取り、コチョコチョと鈴口の割れ目に悪戯して離れていく。その刺激に耐え切れずまたすぐに粘液が滲んでは拭き取られ、滲んでは拭き取られ……。終わりのない刺激に、千尋の内腿がもどかしそうにくねった。

「うーん、先っぽ拭いても拭いても出てくるなあ……処置でこんなに濡れてしまうなんて、さすがにエロちんぽ過ぎますねえ。ここまでの方なかなかいらっしゃいませんよ？」

「う……でもっ♡ こんな、っ♡ こんな、されたらあ……！♡」

「ああ、でも個人差がありますしね。つまり守屋さんはおちんちんが敏感で濡れやすくてエッチな気分になりやすい人なんですよね。その分日常生活で貞操帯に締め付けられる事も多いと思うので、多めにお薬塗って炎症を予防しておかなきゃいけませんね」

「う……うう……♡」

顔から火が出そうな羞恥を感じる言葉の連続に、シーツに頬を擦って身悶える事しか出来ない。

一方男性医師はと言えば、である。

(ああ、可愛いなあもう)

千尋が顔を覆っているのをいい事に、愉悦の表情を隠そうともせず、ねっとり視線を注ぐ男。実はこの男、ゲイセクシャルなのだ。医師である事には違いないが、好みの人旦那を見かけると、治療と称してたぶらかし、エッチな悪戯を行う悪癖があった。

「じゃあお掃除し終わったので、次はお薬行きますね～。最初は少しヌルヌルしますが、吸収されていきますから大丈夫ですよ～」

そう言って、新しい脱脂綿にたっぷり液体を纏わせていく。この液体も、薬なんてのはただの建前。本当はエッチな気分を促進する催淫ローションなのだ。

張り詰める裏筋にヌルヌル脱脂綿を触れ合わせ、ゆっくりと上下に行き来させながら竿を一周なぞっていく。それからカリ首の段差をくるくると辿ったり、ぴんぴんと上下に弾いたり、適宜ローションを追加しつつしっかりと染み込ませていく。

「ココは特に汚れが溜まりやすい部分なので、しっかりと塗って行きますね」

「んひ……っ！♡」

鈴口に片手を添えた男は、濡れた割れ目をくばあ、と左右に挟み開けた。奥に息づく尿道口まで届くよう、弱い粘膜には特に重点的に催淫液を塗り込んでいく。

「ひ♡ ひんっ♡ そこ、や……♡ んんっ……！♡」

「ほらまたエッチなお汁溢れてきてますよ？ ちんぽもビクビクしてて落ち着きがないから塗りにくいなあ。ねえどうなってるんですか？ 少しはちんぽ濡らすの我慢出来ないんですか？」

「ちが♡ なんか、ちんぽ熱くてえ♡ 勝手に、ヒクヒクって、なってしもてえ……！♡ こんなっ♡ 三日も、我慢してるのに、こんなのっ……！♡」

「も～仕方ないなあ……じゃあオナニーしますか？」

「……へっ！？」

まさかの提案に、弾かれたように顔を上げる千尋。

「……まあ、射精はダメですけどね。でも、私の指示の範囲内でしたらペニスを扱って気持ちよくなっていいですよ。どうします？」

しかし、千尋の困惑と期待を全て見透かしたような笑みを浮かべ、医師の男はそう言った。

人に見られながらオナニーするなんて恥ずかしいけど、射精出来ないのはつらいけど、脱脂綿で中途半端に弄られ、さらに媚薬を仕込まれてしまった体はもう疼いて仕方なかった。

三日間我慢したものを、思いっきり握って扱けるのだ……。
そう思うだけで、はっはと呼吸が荒くなる。

「し、したい、です……♡」

「そうですか、では、ペニスを握って大丈夫ですよ。ああ、
体勢はそのままでね。よく見えるようにしておかないといけ
ませんのでね」

足を左右に大きく開いた恥ずかしい格好のまま、他人に視
線を注がれつつ、そっとペニスに手を伸ばした。握りこむと
思った以上に熱を持っていて、動かさないうちからドクンド
クンと大きく脈打っているのが分かる。

「では、ゆっくり扱いていきましょうね。ゆーっくり、上下
にシコシコして下さい」

「んう……♡」

思いっきり扱いてしまいたい衝動を我慢して、医師の指示
通りの緩慢な手コキを開始した。たっぷりと塗られたローシ
ョンがいい具合にヌルヌルと手を滑らせて、堪らない快感を
もたらしてくる。

(気持ちいい♡ 三日ぶりのちんぼコキ♡ きもちいい♡
ああ、でも……足りひん……♡ もっと思いっきり……♡♡)

「あっ、あの……♡ もっと、っ、はやく……扱いて、いい
ですか……？」

「もっと早く扱きたいんですか？」

「ッ……う……扱きたいです……♡」

浅ましいオネダリに、やれやれといった表情で首を振る男。
「仕方ありませんね。守屋さん、おちんちんがエッチなので
辛いんですね。特別に許してあげますよ」

その言い方さえ、圧倒的に本能が優位となった千尋にとっては、気分を盛り上げる要素の一つに過ぎなかった。「ありがとうございます」と、許可に対して小さく礼を述べてから、思いっきり竿をコキ下ろして自慰に耽っていく。

「ふ♡ ふう♡ う♡ んんっ♡♡」

「ふふ……いつもそんな風に扱いてオナニーしてるんですね♡
♡ 結構激しめがお好きなんですね♡」

「んん♡ あっ、いわへん、といてえ♡♡」

「でも嬉しそうに腰浮かせてますよね？ 恥ずかしいのもお好きなんですね？」

「く、ふうう♡♡ ちが♡ っ、ちがう、けどおっ♡♡」

ちゅこっちゅこっちゅこっちゅこっちゅこっ♡♡ 淫音と共にさらにペースが早くなっていく。溜まった快感が膨れ上がり、下腹をジリジリと焦がしだす。その感覚を堪能していると、いよいよ奥から込み上げてくるものがあった。イきそう。イける。もうこのままイってしまえば……。

「はいストップ！ 手、止めて下さいね～」

「ッ……！♡ は、い……♡」

しかし、絶頂へと向かっていた千尋は、医師の鋭い制止の合図ではっと我に返る事となった。もっと扱いていたい欲求

を押しとどめ、非難がましく律動する竿から必死の思いで手を離す。途端、拾い集めていた快感の波がすうっと引いていってしまい、名残惜しさだけがきゅんきゅんと下腹に纏わりついた。

(もっと……♡ もっと扱きたい♡ もっと♡ もっと♡
もっと……♡♡)

「あれ？ 何か物足りなさそうな顔してますねえ～？ もしかしてもっとしたいんですか？」

愉快そうな口元も、意地悪い声色も、治療の範疇から外れているように思えた。だが、もうそんな事はどうでも良かった。疼く肉竿を慰めたくて仕方なくて、男に対してうりと媚びた目線を絡め、腰をひくつかせつつ頷く。その仕草に、男が静かに滾った様子を見せた。

「じゃあ欲張りな守屋さんのために、寸止めちんぼコキ治療繰り返しましょうか♡ 私が指示して管理してあげるので、一緒に寸止め頑張りましょうね♡」

あくまで寸止めを強調しながら、千尋の膝に乗り上げる医師。そうやって絶対に足を閉じれない状態にした後、何と上半身の衣服を捲り上げ、すりすり乳首を撫で摩り始めた。

「ちょ……なんで、そんなとこ……♡」

「口だけだと反応が遅れちゃう場合があるので、乳首でもお知らせした方が正確なんですよ。乳首を優しく触っている間はちんぼ扱いてオーケー。ただ私が乳首を抓り上げたらちん

ぼコキ止めの合図です。分かりましたか？」

「ひぁ……う……うう……わかり、ましたぁ……♡」

乳輪をカリカリ引っ搔かれるこそばゆさと、抓り上げられる痛み。説明と共に与えられた刺激によって、引っ込んでいた乳頭がぷくりと顔を覗かせてしまった。先ほどのローションで滑りを帯びた人差し指と中指が、勃起乳頭を摘まんで優しくクリクリ転がし始める。

「ふ、う♡ う、うう♡ ん、くう♡」

男に申し掛かれながら、大股開きの恥ずかしい体勢で、乳首扱きによってオナニーの手綱を取られるという何とも倒錯的な状況。だが、優しく胸の頂を弄られながらそうしていると、ペニスが一層ぞくぞくと打ち震えて、気持ちが良くて堪らなかった。ゆっくり、じっくり、オナニーの快感を味わいたいと思うのに、手の動きがみるみる早くなってってしまう。

（なんかっ……♡ 乳首されると、腹の奥からヘンなのくる……ッ♡ こんな知らへん♡ 乳首しながらオナニーなんて、知らへんかったのにい……！♡♡）

連動する乳首とペニスの快感に戸惑いつつも、根本から先端まで大きくストロークする手コキが止められない千尋。激しい動きとどんどん溢れる我慢汁のせいで、ぬちゃぬちゃと卑猥な音が鳴り響く。

（あっ、あっ♡ また気持ちいいのきた♡ ゾクゾクってき

てるっ♡♡ きたっ♡ きたあっ♡♡)

「はい、ちんぼコキやめ！」

「いッ！！♡♡」

陰囊がせり上がり始めた所で、乳輪が伸びる程強く乳首を引っ張り上げられた。突如与えられた鋭い痛みに、思わず手が止まってしまう。

「じゃあ一旦手をベッドにおろして下さいね」

「ッ、ふ♡ ううっ……は、い……っ♡♡」

しかし、千尋が大人しく手を離しても、男は乳首を抓り上げたまま戻そうとしなかった。

「あっ、あのっ♡ ちくび、っ、いつまでっ……！♡」

「おちんちんのビクビクが落ち着くまでずっとこのまんまですよ♡ ほらほら、早くちんぼ落ち着けないと、おっぱい伸びちゃいますよ～？♡」

「ひっ、やだ♡ ん、んんっ……ふうっ♡ ふううっ♡♡」

抓った乳首を、さらに指で擦り潰すように刺激を加える男。痛みと、その奥にあるチリチリ燻るような感覚で、なかなかペニスの痙攣が治まらない。結局一分ほど、ずっとおっぱい抓りをされ続けてしまった。

「ようやくエロちんぼ落ち着きましたね～♡ じゃあまた手コキ再開しましょうか♡ ほら、抓られて赤くなっちゃった乳首、やさし～くクリクリして慰めてあげますね♡」

「んひっ♡ ひっ♡ それ、だめっ♡ んんっ、く、ひうう

♡♡」

こりゅっこりゅっこりゅっこりゅっ♡♡ ジンジン疼く乳頭を、ぬるぬるの指で優しく丹念にシコられる。その刺激は一度目とは比べ物にならなかった。おっぱいを甘やかされる快感をオカズに、再度自慰へと耽っていく。

(気持ちいい♡ きもちいいっ♡ ちくびもちんぽもゾクゾクして気持ちいい♡♡ あああ♡ こんなのもたすぐ寸止めさせられる♡♡ 我慢♡ 我慢しなきゃ……♡♡ きもちよくなるの、我慢、しないとダメなのがいい……！♡♡)

射精出来ないというのに、完全に射精に向かうような手の動きで、一心不乱に手コキを続けた。鼻からは悩ましい呼吸音が抜け、ちらちらと赤い舌を覗かせる唇は、唾液でだらしなく濡れそぼり始める。根本から先端まで甘い電気がピリピリと駆け上がり、腰元が、背筋が、官能のあまり浮き上がる。

「はいストップ！」

「ひ、あゝ あっ！♡♡ あっ♡ あっ……♡♡ ッくふううう……♡♡」

しかしそこで乳首が抓り上げられた。突如快感の波から放り出され、射精を期待しきったペニスは非難がましく首を振り、先走り汁を垂れ流した。

「ふっ、う、うう……♡♡ せんせえ、こんなの、無理い♡もおイきたい……♡」

「こーら、お股くねくねさせてもダメですよ♡ 頑張っってち

んぼ落ち着けて下さいね♡ それともオナニーお終いにしますか？ アクメ直前の気持ちい〜いおちんちんシコシコここで終わりにする？ そしたら後は貞操帯つけてお家に帰るだけです？ また数日オナニーはオアズケですよ？」

「うう……♡」

こんなの泥沼だと分かっているのに、続けても射精させて貰えないのに、でもこんな状態で放り出されてまた禁欲生活が始まるなんて耐えられなかった。ふるりと首を横に振る。目先の快感を餌にされ、止め時を見失っている様子を見て、男が愉快そうな表情を浮かべた。情欲をなみなみと湛えた目つきだった。

「じゃあ、守屋さんが満足するまで、ずーっと寸止めちんぽコキ続けましょうね♡」

そこからは延々と、ねちっこく乳首を責められながらのイキ我慢オナニーをさせられ続けた。

そんな事をしてても性欲は慰められるどころかどんどん増していくばかりで、もどかしさと熱さがジクジクと股の間を蝕み続けている。そしてその辛さをなんとか鎮めたくて寸止めオナニーに没頭し、さらに体がグズグズに熟れていくという悪循環。優しく握って上下に撫でるだけで、痺れるような快感を覚える程敏感になった肉棒を、少し扱っては手を離し、少し扱っては手を離し、ずっとその連続だ。他人に手綱を